

Φ. И. チュッチェフ政治詩試訳(12)

大 矢 温

はじめに

「Φ. И. チュッチェフ政治詩試訳(1)～(11)」に引き続き、おもにタラーソフ編集のチュッチェフ著作集『ロシアと西欧』において「哲学詩」として分類された作品を中心に、チュッチェフの詩作の中から彼の政治思想を分析する手がかりになりそうなものを選び、6巻本の全集をテキストとして訳出を続ける。

1) 無題²

灰青色の影が融けあった、
色は褪せ、音は眠りについた——
生命、活動は解消した³
薄暗闇に、遠いうなりに…
目に見えぬ蛾の飛翔が
夜の大気の中で聞こえる…
言い様もない憂いの時！…
全ては我のうちに、我は全てのうちにある！…

静寂の薄暗闇よ、まどろみの薄暗闇よ、
我が魂の奥底に広がっておくれ、
静寂の、物憂げな、香ばしい薄暗闇よ、
全てを満たし、鎮めておくれ——

感覚を忘我のもやで
 溢れるばかりに満たしておくれ！…
 根絶を味わわせておくれ、
 まどろむ世界と混合させておくれ！

先行研究に於いてすでに指摘されているように、母音に注目した場合にリズム、および *разрешить, вкусить* といった単語の用語法に特徴がある⁵。

蛾が登場するので場面は夏の夜であろう。蛾の飛翔が聞こえることから「部屋の中」と推察することができるが、部屋の中であれば、蛾の飛翔が聞こえるほどの静寂の中、窓から夜霧が流れ込み、その中で作者はまどろむ世界と一体化しているのであろう。

「解消した」という意味で使われている *разрешил* は接頭辞「раз」に霧散するイメージがある。ここでは1行目の「融けあった」の同義語として使われている。自我や具体的な行動は大自然のカオスの中に融けあい、解消するのである。

日本におけるこの詩作の先行研究としては、坂庭氏はその博士論文の中の一節「『薄闇 Сумрак』の形象」でこの詩を分析している⁶。ここで坂庭氏は冒頭の「影」の「とけあい」を「昼から夜へと変化していくその過渡的な瞬間」⁷、「昼」と「夜」の二つの領域の中間」と捉え⁸、「薄闇」をその「あいだ」の、「きわめてあいまいな性格のもの」としている⁹。

しかし、この「薄暗闇」は6行目にもあるように「夜の大気の中」とされている。冒頭で登場する「影」が昼の光によって作られた、輪郭を持つ昼の世界に属するのに対して、「薄暗闇」は輪郭を失いカオスとなった夜の世界に属すると解釈できよう。つまりこの詩における「薄暗闇」は昼と夜との中間の状態ではなく、輪郭のある（つまり光と影のはっきりした）昼に対する、（光と影の境界を失った）夜のカオスの世界のことであろう。

2) 無題¹⁰

カラムジンの偉大な日
我ら、仲間内の追善供養を捧げつつ¹¹、
何を言おうかここで、祖国を前にして、——
何にそれは応えたのだろうか？

どんなにうやうやしく敬虔な賞賛で、
どんな生き生きとした共感で
我らはその日に敬意を表するのか——
民族の、親族の祝日に

どんな挨拶を君に送ろう——
君に、我らの高潔にして善良な天才よ、
動揺と疑惑
憂い多き時代の中で——¹²

かくも魂にいまわしい——
無力な正義、真っ赤な嘘の、
その醜悪な混合を前にして
気高く善を求める

魂よ、君のはそれであった、
いかにそれはここで戦ったか——
神の召す声に
抗いがたく目的に向かったのか？

我らは言う：我らの道しるべたれ、
導きの星たれ——
照らせ我らの破滅的な薄闇を、
けがれなき自由な魂よ、

不朽の全き構造に
すべてをまとめ、
すべて人間的に善なるものを、
ロシアの感覚によってしっかり固められる——

栄誉を前にして
首を縦に振らず、
最後までロシアのツァーリ、友人
そして臣民でいられた者よ。

1866年12月1日がカラムジン生誕100周年に当たるため、ロシア文学愛好会で12月3日にカラムジンを記念した夕べが催された。この詩がそれに合わせて作られたものだと考えると、創作時期は1866年11月末から12月初めということになる。

カラムジン自身、西欧の事情に通じており、アレクサンドルⅠ世の時代には国史編纂官として専制の立場から『ロシア国史』を著しているのでチュッチェフが親近感を抱いたことは疑いもない¹³。ただしこの詩作の事情について、娘婿のイヴァン・アクサーコフは、チュッチェフ自身の言葉として、彼が民族主義的な意図を持ってこの詩を作ったことを記録している。アクサーコフによれば、「ロシアの感覚は全人類性の原理の犠牲になるもの」だとか「人道的なもの」や「人類的なもの」が「ロシア人民の感覚と相容れない」と考える「ペテルブルクのいくつかの上層社会において支配的な概念」、つまりロシアの民族性を否定する見解に反論するためにこの詩が有効だ、とチュッチェフが考えてい

たという¹⁴。アクサーコフもまた、これら「高位のヨーロッパ人」によるこのような「奇妙な概念」がポーランド問題やバルト問題で悪影響を与えることを危惧しているのだ¹⁵。

したがって第7聯の「すべて人間的に善なるものを、ロシアの感覚によってしっかり固められる」という部分からは、東西両ヨーロッパを統合する力としてロシアを見るチュッチェフの思想を読み取ることができる。また、第8聯の「栄光を前にして」という部分は西ヨーロッパからの賞賛をカラムジンが拒否した、と言う意味で読めよう。

3) 無題¹⁶

空に雲が解けていく、
そして、猛暑の上を
火花の中を輝く川は流れる、
まさに鋼の鏡のごとくに…

時々刻々熱気は強まり、
陰は無言の森へと去った、
そして白みつつある野原から
蜜の香りが漂う。

絶好の日よ！何世紀もが過ぎて行く——
このまま、永遠の流れの中で、
川は流れそして輝いているだろう
そして野原は暑気の中で息づいているだろう。

原稿の書き込みから1868年8月2日、チュッチェフのオーフスツクの領地の近くの農場での作とされている¹⁷。

川や森といった自然が「永遠の流れの中で」今のまま「流れそして輝いて」、あるいは「息づいている」として、自然の永遠性を謳った詩である。しかしその永遠の自然を前にした観察者チュッチェフを想定すれば、この詩のテーマは永遠の自然と個人のはかなさとの対比、ということになるろう。自然の永遠性を謳った詩は、同時に自らの有限性の自覚でもあるのだ。「死すべき凡人の眼差し」と、それに「無垢な光線で応え」る「天上の極み」の「気高き星」との対比をテーマにした「無題（宴は終わった、合唱は止んだ…）」¹⁸にも通じるテーマである。

4) コヴァレフスキーの思い出¹⁹

そしてほら、祖国の戦の並み居る強者には
 ならなかったのだ、ふたたび——
 悲しい喪失に嘆息する、ふたたび
 すべての誠実な、ロシアの心は。

生きた魂よ、彼は抑えがたく
 いつどこでも自らに忠実だった——
 生きた炎よ、しばしば煙を立てて
 息の詰まるような中で燃えていた…

しかし彼は真実を信じた、そして揺るがなかった——
 自らの全時代を俗悪さと戦った、
 戦った——そして一度たりとも屈服しなかった…
 彼はルーシではまれに見る人だ²⁰。

一人ルーシのみが彼を惜しむのではない——
 かの地、異国の地でも、彼は大切だった——

かくも血が慰めもなく流れる、かの地でも、
彼に感謝の涙が捧げられる。

1868年11月20日に没したエゴール・ペトローヴィッチ・コヴァレフスキーに捧げたもの。コヴァレフスキーは元々、鉱山関係の専門家だったが、外務省から資源調査で派遣されたモンテネグロにおいて、当地における、オーストリアからの独立運動に接し、これを契機にスラヴ問題に関与するようになった。1851年の宗主国トルコとの軍事衝突に際しては、政治将校（コミッサール）としてモンテネグロに派遣されている。クリミア戦争に於いてはドナウ公国やセヴァストーポリの防衛戦に従軍し、新帝アレクサンドルⅡ世の外務省改革に際しては新たに外務大臣に就任したゴルチャコフの元でアジア局の局長に就任している²¹。外務省内では、国際関係における民族的要素を重視するゴルチャコフの元でコヴァレフスキーはバルカンにおけるスラヴ問題を重視してスラヴ民族運動の活動家と接触を保った²²。特にバルカン地域に関する外交政策としては、ロシアのバルカン進出の足がかりとしてこの地域の公使館網を整備したりスラヴ系諸民族の若者に対するロシアへの留学制度を創設したりしてクリミア戦争後、この地域で失墜したロシアのprestigeを「かなりの程度回復した」と評価されている²³。チュッチェフとは外務省の同僚であり、実際に戦争に参加した点がチュッチェフとは異なるにしろ、異民族からのスラヴ民族の解放という点でも思想的に一致する。チュッチェフにとってコヴァレフスキーは「異国」モンテネグロやドナウ公国に於いても「感謝の涙が捧げられる」「勇敢な戦士」であった。この詩をアクサーコフの新聞『モスクワ』に掲載する際もコヴァレフスキーを高く評価するチュッチェフはアクサーコフに対し、この詩に沿えるためにアクサーコフに巻頭論文を書くよう依頼している。「彼はその価値がある」²⁴。

5) 1869年2月14日²⁵

偉大な日キリルの命日よ——
いかなる衷心からの普通の挨拶で²⁶
我らは千周年を
聖なる記憶を祈るのか？

いかなる言語で心に刻むのか、この日を
彼に語られた言語にあらずして、
兄弟と、友人と別れ、
心ならず彼が自らの亡骸をお前に残した日を、ローマよ…

彼の仕事に係わった
一連の時代、何世代をも通して
我ら、我らが彼の航跡を曳いてきた
教唆と疑惑の中で、

一方我らは、彼のように、仕事を未成就な故に、
それと共に歩む——彼の聖なる言の葉を
思い出しつつ——その時我らは叫ぶ：
「自らを欺くな、偉大なロシアよ！

信じるな、異人を信じるな、故国よ、
彼らの偽りの賢さやあからさまな詐欺を、
聖人キリルのように、お前も放棄するな
スラヴへの偉大な務めを」と…

プラハにおいてロシア語とチェコ語で発行された小冊子『1869年2月14日サント・ペテルブルクとモスクワにおける聖キリルの千周年記憶日の祝典』²⁷に印刷された。

キリルは兄メトディイとともに東ローマ帝国からモラヴィアに派遣されスラヴ世界にキリスト教を布教した。「亡骸を」ローマに「残した」とあるように、キリルは867年にローマ教会からモラヴィア伝道とスラヴ語典礼の許可を受けた直後にローマで病死している。これはキリスト教会の東西大分裂の前のことであるからキリスト教の異教世界への布教という文脈で解釈することも可能だが、チュッチェフとすればローマこそが西欧精神の根本であるので、キリルの客死は「心ならず」ということになる。

キリルとメフォディイはスラヴ語を表現するために「キリル文字」を発明したとされているほか、現地語を典礼言語として採用したため、スラヴ諸民族共通の聖人として汎スラヴ主義の文脈で重要な位置を占めている。小冊子が印刷された当時のプラハではチェコ人がオーストリア帝国からの独立に向けた活動を活発化しており、この小冊子に先立つ1867年のモスクワにおける「スラヴ会議」には27名の代表団を送っている²⁸。

他方、ロシアの汎スラヴ運動の中心であった「スラヴ慈善協会」においてもキリルの千周年は重視されており、1867年の「スラヴ会議」の延長として千周年の記念行事が計画されている²⁹。同時に、同じくスラヴ慈善委員会によって企画されながら「不発」に終わった1862年のキリルとメフォディイ千年祭との延長上にこの企画が意識されたことは想像に難くない³⁰。他方チュッチェフのこの詩は1869年の記念日に合わせたものであるが、この詩と並んでチュッチェフは、約4ヶ月後の1869年5月11日のロシア正教会によるキリルとメフォディイの祈祷に向けて「1869年5月11日」と題する詩を書いている³¹。スラヴ慈善協会の催しと教会の祈祷はチュッチェフの中で融合した一連の行事であったに違いない。ちなみにこの年の8月にはスラヴ慈善協会の主催でチェコの宗教指導者ヤン・フスの生誕500周年も祝われている³²。

6) 無題³³

我々には予測できない、
いかに我らの言葉が響くかを、——
そして共感が与えられるかを、
いかに我らに感謝が与えられるかを…

手稿の書き込みは「1869年サンクト・ペテルブルク」であるので、創作時期もそれに一致すると考えられる。この手稿はH. M. シャホフスキー公爵夫人ヴァルヴァラ・フォードロヴナのアルヒーフの中から発見された。したがって公爵夫人に向けて書かれたものとするのが自然である。しかし、いかなる「我らの言葉」が誰に対して「響く」のか、誰からの「共感」や「感謝」が与えられるのかについては検討を要する。ただし、公爵夫人がゴンチャロフを始めとした外務省関係者と近い関係にあったことと69年という時期を考慮すると、以下に分析する「8) 無題 (エカテリーナ溪谷での…)」と同様に、オストゼイ問題に関係している可能性も否定できない。

7) 無題³⁴

二つの力がある——二つの宿命的な力が、
自らの全人生を我らはその手の元に、
揺りかごの日から墓場まで、——
一つは死、もう一つは——人の裁き

これもあれも等しく抗いがたく、
そしてこれもあれも他人に応えない、
容赦はなく、抵抗を許さない、

それらの宣告はすべての口をふさぐ…

しかし死はより公正だ——聾盲とは無縁だ、
何にも動かされず、揺るがない、
それは恭順なものも不平を言うものも——
その大鎌ですべて同じにする。

世間はそうではない：鬭争、反目を——
嫉妬深い支配者は——それを許さない、
すべて一面を刈り取るのではなく、最良の穂を
しばしば根こそぎ引っっこ抜く。

困ったことに——ああ、二重に困ったことに——
その誇り高い力にとって、誇り高く若い力にとって、
毅然とした眼差しと、口には微笑みをたたえて
多勢に無勢の戦いに——参加した力にとって、

その力は、自らの全権利を、
宿命的に認識した際、佳人の勇気を持って
敢然と、ある薫陶のもとで
中傷に立ち向かう

その力は仮面によって顔を覆わず、
顔が下向くことを許さずに、
ちぢれ毛から、埃のごとく、
脅し、悪口、そして恐ろしい悪罵を吹き払う、——

そう、困ったことに——純心であればそれだけ、

それは罪があるように見える…
 それが世間だ：それはより非人間的だ、
 その罪が人間的により純粹であるところでは。

1869年3月の作とされている³⁵。

この詩より少し前の1869年1月の「無題（あなたはポーランド人に生まれなかった）」においてチュッチェフは「スラヴ主義」に対するスカリャーチンの『報知』紙による攻撃に対してこれを「第三課的」と反撃しているが³⁶、この詩もまた、「オストゼイ問題」をめぐる論争の中で書かれたものである。

この「オストゼイ問題」は、バルト地方におけるドイツ人の特権的地位とそれに対するロシア政府の民族政策を軸に展開した議論である。特にこの問題は、1868年にサマーリンの『ロシアの辺境』第1巻がリガで出版されると出版界を中心とした活発な議論へと展開していた³⁷。この論争において、反ドイツ人の論陣の先鋒に立ったのはチュッチェフの娘婿であるイヴァン・アクサーコフとその新聞『モスクワ』であった。アクサーコフは『ロシアの辺境』において示された資料を引用しつつ、バルト地方においてドイツ人が現地住民を搾取し文化的にもドイツ化を進めているとして、これを放置しているロシア政府を厳しく批判した。その際アクサーコフが当面の敵としたのはロシア政府内の「保守派」とスカリャーチンの新聞『報知』であった³⁸。しかし、まさにこのスカリャーチンを批判した記事が元でアクサーコフの新聞『モスクワ』はチュッチェフのこの詩に先立つ1868年10月15日号を最後に閉鎖されてしまう。これは創刊以来2年足らずで9回の警告と3回の停刊処分を受けた後のことであった。

しかし政府の側からの攻撃はこれにとどまらなかった。69年に入るとアクサーコフに対するさらなる処分が内務大臣から元老院に提起される。一方アクサーコフはこれに対する弁明書を元老院に提出し³⁹、この事件は世間の注目を集めることとなった。「大臣と新聞編集者との間での係争が始まった」、「これは公衆に大きな騒ぎを引き起こした」⁴⁰。

このようなアクサーコフに対する指弾の中で、チュッチェフはアクサーコフ

に嫁いだ娘のアンナを気遣い、彼女に手紙を書く。その中でチュッチェフは「スラヴ主義に好意を抱かない政府の若干のメンバーからの新たな抑圧」を危惧しながらも、アクサーコフの社会評論活動は「全社会の注目と尊敬を集めている」として彼女を勇気づけている⁴¹。この詩もその文脈で解釈するべきであろう⁴²。

さて、この詩の後半の「彼女 (она, ей)」の解釈に若干の問題が残る。これを「魂」と解釈するのが一般的だが⁴³、文法的には一番近くの女性名詞「力」が「彼女」である。ここでも「力」と訳した。内容的には人間を指す言葉で、具体的には論壇で孤軍奮闘するアクサーコフあるいは彼を支えるアンナのことであろう。ここではアンナと解釈した。ちなみにアクサーコフは「ちぢれ毛」ではなく、他方、アンナはちぢれ毛であった。1823年生まれですでに46歳になったアクサーコフを「若い力」というのにも疑問が残る。

8) 無題⁴⁴

エカテリーナ溪谷での
ピョートルの植林が、
木々が鬱蒼と成長したように――
今ここに植林された、
ロシアの生きた言の葉は
成長しより深く根付くべし。

この詩は1969年に「沿バルト地方におけるロシアの言葉」と題されて『エストランド県通報』紙に掲載されたもの。この年から『エストランド県通報』紙は従来のドイツ語に加え、ロシア語の記事を掲載する欄を新設した。「ピョートルの植林」とはタリン近郊のエカテリーナ宮殿の周りにピョートルⅠ世が植林を命じた故事を指す⁴⁵。チュッチェフのバルト地方におけるロシア語の普及を歓迎する気持ちが表現されている。

上の「2) 無題 (二つの力がある…)」でも述べたとおり、1868年のサマーリ

ンによる『ロシアの辺境』以来、バルト・ドイツ人の問題は「オストゼイ問題」としてロシアの公衆に広く意識されるようになった⁴⁶。しかし「オストゼイ問題」をロシアにおいて最初に提起したのはこれに先立つ1848年にサマーリンによって著された『リガからの手紙』である。他方、上述のイヴァン・アクサーコフもバルト地方における現地住民の「ドイツ化」の問題としてこの問題を重視していた。すでにこの『手紙』が原因でサマーリンが、つづいてアクサーコフが逮捕された経験を持つ⁴⁷。それにもかかわらず、「スラヴ派」と目される人々はバルト沿岸地域のドイツ化を批判し続けた。アクサーコフにとっても、そしてチュッチェフにとってもバルトの問題はロシアの民族問題に重要な意義を持つ問題だったのである。

9) A. H. ムラヴィヨフに⁴⁸

崖の高みに
 空に輝く聖堂が
 あたかも空に舞うがごとく、
 高く去り行くところ——目にも麗し——
 その地の聖なる守護者
 使徒アンデレが⁴⁹
 キエフの空に白く映えつつ
 今日に至るまで十字架を輝かせているところ——

その足元に自らの住み処を
 敬虔に添え寄せて、
 君よそこで生きよ——閑なき住民よ——
 勤労の日の暮れ方に。
 誰が、感動もなく
 今も敬意を捧げずにおれようか、君の内の

生命と志向の統合と
戦いにおける不屈の堅牢さに？

そう、多くの、多くの試練を
君は耐え、克服した…
生きよ、世間的な意識ではなく
自らの功績と善行の——
いや君の愛のため、いや生き様のために、
確信されている、
君によって生きた信仰と
不変の思考様式が可能であることが。

アンドレイ・ニコライヴィッチ・ムラヴィヨフに捧げた詩。ムラヴィヨフはチュッチェフからすると、彼の少年時代の家庭教師のライチの元で共に学んだ、いわば兄弟弟子である。晩年はキエフに住み1874年にそこで没している。ムラヴィヨフには教会史に関する著作があるので、おそらくチュッチェフがキエフの古寺名刹を訪れた際には彼がそれらの由来について解説したのであろう。そのムラヴィヨフとのキエフでの再会がこの詩作の動機となっている。妻宛の手紙からチュッチェフがキエフの街、およびそこでのもてなしに大変満足した様子がうかがえる⁵⁰。

そもそもチュッチェフのキエフ来訪の目的だが、7月30日にクリミア旅行の途中で皇帝一家がキエフを来訪する予定だったので⁵¹、それに合わせてチュッチェフも前年の末に開通した鉄道で⁵²、クールスクからキエフ入りしたと考えられる⁵³。皇帝一家を歓迎するためにキエフではかがり火や花火などによって普段より美しく飾られており⁵⁴、旧友との再会もさることながら、これがチュッチェフの「期待を裏切らなかった」ことの一因であろう。

しかし、チュッチェフが何を「期待」してキエフ入りしたかについては一考を要する。上述のように、彼のキエフ入りは皇帝のキエフ来訪に合わせたもの

と考えるのが自然である⁵⁵。ところが皇帝の健康がすぐれなかったため、予定は短縮され、30日夜にキエフに到着した皇帝は、翌朝早くキエフを出発している。それにもかかわらず、皇帝への面会を実現しているので⁵⁶、かなり強引に「期待」を実現したことが伺われる。時期的にオストゼイ問題に関して皇帝周辺に伝えようとした可能性はある。

創作の時期も1869年8月の作と考えるのが妥当であろう。

むすび

今回、分析の対象にした詩作の中には、オストゼイ問題に関わる詩作がいくつか含まれていた。オストゼイ問題はチュッチェフの政治思想の中で必ずしも中心的な位置を占めるとは言えないが、ヨーロッパの西と東、ロシア帝国の全一性、およびスラヴの問題といった彼の思想の根幹をなす問題と深く関わりを持つ問題である。紙幅の関係で深い考察ができなかったが、いずれ稿を改めて論じたい。

注

- 1 *Тарасов Б. Н.* сост. *Ф. И. Тютчев: Россия и Запад. М., 2007.*
- 2 *Тютчев Ф. И.* «*** (Тени сизые смешались...)» // Полное собрание сочинений и письма в шести томах. М., 2002-2004 (далее “Тютчев”). Т. 1. С. 159.
- 3 ここでは「終了する」、という意味で разрешить を使っている。
- 4 「вкусить 賞味する」、は普通、美味しいものに繋がる単語である。ここでは自我を解消して自然のカオスに一体化することが「甘美」なのであろう。
- 5 *Козырев Б. М.* Из первого письма // Литературное наследство. 1988. Т. 97. Кн. 1. С.74-83.
- 6 坂庭敦史、早稲田大学大学院文学研究科博士論文『フォードル・チュッチェフ研究』、2004年、52頁参照。
- 7 同上、51頁。
- 8 同上、52頁。
- 9 同上、51頁。
- 10 «*** (Великий день Карамзина...)» // Тютчев. Т. 2. С. 166.

- 11 原語は *братский*。そのまま訳せば「兄弟の」だが、カラムジンは 1766 年生まれだから 1803 年に生まれたチュッチェフにとって「兄弟」と言うには年が離れすぎている。また、この語は親しい友人関係にも使われるが、カラムジンの晩年に当たる 1820 年代にチュッチェフはロシアを離れていたため、個人的にも知己はなかったと考えられる。強く共感を覚える、ごく親しい間柄という意味で「仲間内」と訳した。
- 12 カラムジンはフランス大革命と前後してヨーロッパを旅行し、大革命直後の 1790 年のパリの様子を記録している。ニコライ・カラムジン著、福住誠訳『ロシア人の見た十八世紀のパリ』1995 年彩流社、参照。
- 13 См. *Ширинянец А. А. Русский Хранитель. М., 2008. С. 47.*
- 14 *Аксаков И. С. Биография Федора Ивановича Тютчева. Репринтное воспроизведение издания 1886 года. М., 1997. С. 285.*
- 15 当のアクサーコフについて指摘するなら、民族問題に関するアクサーコフの思想の特徴は、帝国外のスラヴ民族の問題と平行して、ポーランドおよびオストゼイにおける「ロシア問題」に着目している点である。この問題に関する彼の基本的な立場は、多数の現地住民を「ドイツ人」「チュートン人」や「ポーランド貴族」がドイツ化、ポーランド化しようとしているので、これに対してロシアとしては言語や教育の分野でのロシア化イデオロギーを強化せよ、と言うものであった。Напр., *Аксаков И. С. В чем сила народности? // «День», 23 марта 1863. Перепечатано: Полное собрание сочинений. М., 1887. Т. 2. С. 89-96.*
- 16 «*** (В небе тают облака...)» // Тютчев. Т. 2. С. 190.
- 17 “Комментария” // Там же. С. 553.
- 18 拙稿「Ф. И. Чюच्чеф政治詩試訳(9)」、『文化と言語』第 72 号、2010 年 11 月、81-82 頁参照。
- 19 «Памяти Е. П. Ковалевского» // Тютчев. Т. 2. С. 192.
- 20 「まれ」の原語は *редкий*、次の聯の *дорог* の同義語として使われている。
- 21 «Ковалевский, Егор Петрович» // *Русский Биографический словарь. Под ред. Половцова, А. А. С.-Пб. 1903.* コヴァレフスキーに関する最近の研究としてはグステリンの略伝がある。См. *Густерин П. В. Е. П. Ковалевский – дипломат и востоковед // Вопросы истории. 2008. № 8. С.148-150.* クリミア戦争後のゴルチャコフ時代のロシア外交については拙稿「クリミア戦争とゴルチャコフ外交 – 敗戦処理と大改革 –」、中央大学法学会『法学新報』、2000 年 9 月、第 107 卷 3・4 号、参照。
- 22 *Хевролина В. М. и др. История внешней политики России: Вторая половина XIX века. М., 1997. С. 61.*
- 23 *Иванов И. С. и др. Очерки истории Министерства иностранных дел России. М., 2002. Т. 1. С. 398.*
- 24 *Тютчев. Письмо И. С. Аксакову от 22 сентября 1868 г. // ЛН. Т. 97. С. 342.*

- 25 «14-ое февраля 1869» // Тютчев. Т. 2. С. 196.
- 26 「普通の」の原語は простой、「ロシア語で」の意味。この詩の直後に、やはりキリルにちなんだスラヴ慈善協会の記念日のために作られた「1869年3月11日」（大矢他「Ф. И. Чюцchef政治詩試訳(4)」、『文化と言語』第66号、2007年3月、48-49頁参照）においても「聖なる純朴さ」という表現が出てくる。キリルとメフォディイがラテン語ではなくスラヴ語での祈祷を広めたことを考慮するなら、この「普通の」言葉による「挨拶」とは、ロシア語による挨拶であろう。
- 27 Празднование тысячелетней памяти первосвятителя славян св. Кирилла 14 февраля 1869 г. в С.-Петербурге и Москве. Прага. 1869.
- 28 スラヴ会議については高田和夫「1867年スラヴ人会議について」、九州大学『法政研究』第70号、2004年3月、および拙稿「Чюцchefと1867年スラヴ会議」、2004年3月、科研費報告集『ロシア思想史研究』第1号、またチェコ側からの資料を使ったモノグラフとしては川村清夫『プラハとモスクワのスラヴ会議』中央公論事業出版、2008年、参照。
- 29 1869年1月11日のスラヴ慈善協会 Санкт-Петербург 支部の会議に於いて「スラヴの啓蒙者キリルの千周年」を来る2月14日に開催すること、および記念日に合わせてキリルに関する学生向けの懸賞論文の創設が決定されている。РГИА (Российский государственный исторический архив), ф. 970, оп. 1, д. 499, л. 13 об. 14.
- 30 1862年のキリルとメフォディイ千年祭については、拙稿「二つの千年紀とイヴァン・アクサーコフ」2010年6月、日本ロシア思想史学会『ロシア思想史研究』第1号（通算第5号）参照。
- 31 大矢他「政治詩試訳(4)」、48-49頁参照。
- 32 同上、49-51頁参照。
- 33 «*** (Нам не дано предугадать...)» // Тютчев. Т. 2. С. 197.
- 34 «*** (Две силы есть...)» // Там же. С. 198.
- 35 “Комментария” // Там же. С. 560.
- 36 大矢他「政治詩試訳(4)」、47-48頁参照。
- 37 サマーリンの『辺境』について、山本健三は「同書は単なるバルト社会批判の書にとどまるものではなかった。それは国内外の反ロシア的勢力に対する宣戦布告の書でもあった」と性格づけている。山本健三「サマーリンの『ロシアの辺境』について」2004年3月、科研費報告集『ロシア思想史研究』第1号、77頁参照。
- 38 См. Цимбаев Н. И. И. С. Аксаков в общественной жизни пореформенной России. М., 1978. С. 147.
- 39 Чюцchefは69年1月2日付の手紙で「この事件が最重要の国家的事件となった」以上ペテルブルクにすることが「大いに、非常に大いに」必要だ、とアクサーコフのペテルブルク来訪を促し、元老院の決定に「抗議」が必要であると論している。Тютчев. Письмо И. С. Аксакову от 2 января 1869 г.

- // Тютчев. Т.6. С. 368-369.
- 40 *Никитенко А. В.* Дневник в трех томах. М., 1956. Т. 3. С. 142.
- 41 *См. Чулков Г.* Летопись жизни и творчества Ф. И. Тютчева. М.:Л., 1933. С. 199.なお、この手紙は『Старина и новизна』誌に発表された他の妻宛の手紙と同様、全集には収められていない。チュッチェフはアンナに宛てた、続く2月20日付の手紙に於いても「反民族主義的、さらには反王朝的な」政府の「一味」について書いている。См. Там же. С.200.なお、この手紙も6巻本全集には所収されていない。
- 42 チュッチェフ自身、オストゼイ問題には積極的に関与している。アクサーコフに対しても外務大臣のゴルチャコフが「そのドイツ人びいきにもかかわらず」アクサーコフの論文に「大いに賞賛した」と伝えるなどして勇気づけている。Письмо от 19 ноября 1867 г. // Тютчев. Т. 6. С. 293.
- 43 ブリュースフはチュッチェフの詩作の中に「死」や「破滅」に引かれる「魂」を認め、この詩の解釈に於いても「彼女」を「魂」と解釈している。См. *Брюсов В. Я.* Ф. И. Тютчев. Смысл его творчества // Брюсов В. Я. Собрание сочинений в 7 томах. М., 1975. Т. 6. С. 202.ポキドフも英訳する際に「彼女」を the soul と解釈している。См. *Покидов А.* Восемьдесят звезд из галактики Тютчева (Eighty Stars from Tyutchev's Galaxy). М., 2003. С. 235.
- 44 «*** (Как насаждения Петрова...)» // Тютчев. Т. 2. С. 201.
- 45 “Комментария” // Там же. С. 562.
- 46 山本健三「1860年後半のオストゼイ問題とロシア・ナショナリズム」『ロシア史研究』第83号2008年、参照。この問題を逆の立場、バルト側から見た場合、これはロシア帝国による「ロシア化」問題となる。この問題に関する研究史については、バフトゥーリナの最近の論文が参考になる。*Бахтурина А. Ю.* «Национальный вопрос» в российской империи в постсоветской историографии // *Русский национализм / Под ред. М. Ларюэли.* М., 2008. С. 115-109.
- 47 *См. Примечания к письму от 6 марта 1849 г. // И. С. Аксаков.* Письма к родным(1844-1849) / Под ред. И. Г. Ямпольского. М., 1988. С. 676.
- 48 «Андрею Николаевичу Мнравьеву» // Тютчев. Т. 2. С. 203.
- 49 日本語では「アンデレ」、ロシア語では「Андрей」。ここで謳われるキエフの聖アンドレイ教会は、使徒アンデレにちなんで1754年に建立された。アンデレが北方布教の際に十字架を立てた場所とされる。現在はウクライナ独立正教会の教会。ちなみに、この詩が捧げられたムラヴィヨフの名前もアンドレイである。
- 50 妻エルネスチーナに宛てて、チュッチェフは「キエフは私の期待を裏切らなかった世界中でも数少ないものの一つだ」と書き送っている。Письмо к жене от 4 августа 1869 г. // *Старина и новизна.* 1917. Т. 22. С. 244.ただし、この手紙も6巻本全集に含まれていない。

- 51 皇帝アレクサンドルⅡ世の南ロシア行幸に皇后マリア・アレクサンドロヴナ、および皇太子セルゲイとパーヴェルが同行した。См. Воспоминания генерал-фельдмаршала графа Дмитрия Алексеевича Милютина 1868- начало 1873. / Под ред. Л. Г. Захаровой. М., 2006. С. 68-72, 193, 194.
- 52 ただしドニエプル川を渡る鉄橋は未完成だったので手前のプロヴァリ止まりだった。См. Там же. С. 194.
- 53 См. Письмо к жене от 26 июля 1869 г. // Старина и новизна. 1917. Т. 22. С. 243.
- 54 «Вечер 30-го июля в Киеве» // Московские ведомости. 6 августа 1869 г.
- 55 チュッチェフは普段面会が難しい人には旅先で会う方が容易だと考えていた。1840年に当時外務省を失職中だったチュッチェフが外務大臣のネッセリローデに面会した際も、両親に宛てた手紙の中で「権力者の社会は、本国にいる時より外国の方がずっと近づきやすく、親切だからです」と外国での面会の理由を書いている。Письмо И. Н. и Е. Л. Тютчевым от 20 января 1840 г. // Тютчев. Т. 4. С. 130.
- 56 См. письмо М. Н. Похвисневу от 12 августа 1869 г. // Тютчев. Т. 6. С. 373; письмо А. Н. Майкову от 12 августа 1869 г. // Там же. С. 347.

(平成23年度札幌大学研究助成制度による研究成果である。)